# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 都道府県・指定都市名 | 山形県 | 学校名 | 東根市立大富中学校 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 人権課題 | 高齢者 | 対象学年・取り扱った教科等 | 中学校１・２・３年<br>道徳・特別活動 | 時数等 | 通年 |

| | |
|---|---|
| 目標・人権教育のねらい | 地域の幸せ（社会参画）<br>　防災訓練や社会貢献活動を「地域の幸せを創造する活動」と再定義。活動を通じ「自分の行動が地域の安心や喜びに繋がる」という自己有用感を高め、社会の一員としての自覚を深めた。 |
| 実施した内容 | ・防災訓練（小中合同による地域防災訓練）<br>・社会貢献活動（地域の活動への参加、各種ボランティア等） |
| 工夫した点 | 防災訓練や社会貢献活動を「地域の幸せを創造する活動」と再定義。<br><br>活動を通じ「自分の行動が地域の安心や喜びに繋がる」という自己有用感を高め、社会の一員としての自覚を深めた。 |

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | |
|---|---|
| 他教科との関連 | 特別活動における学級活動の内容（１）～（３）と関連させ，人権課題について学習した。特に，振り返り自己との葛藤場面と位置づけ，実施内容との関連を図った。 |

## 事業成果

調査手段　Q-Uアンケート　　調査項目　以下に示す項目

①．とてもよくあてはまる　　②．どちらかというとあてはまる
③．どちらかというとあてはまらない　　④．まったくあてはまらない

≪知識・理解≫
・自分を頼りにしてくれる友人がいる
　１回目調査比、①の割合が１・２年で増加。３年は①＋②の割合が増加。

≪価値・態度≫
・ケンカをした時、自分に悪い点がなかったか考えている

| | ≪５月≫ ① | ② | ③ | ④ | | ≪１１月≫ ① | ② | ③ | ④ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1年 | 80.5 | 17.1 | 2.4 | 0.0 | ⇒ | 85.4 | 14.6 | 0.0 | 0.0 |
| 2年 | 72.2 | 22.2 | 5.6 | 0.0 | ⇒ | 75.0 | 25.0 | 0.0 | 0.0 |
| 3年 | 73.7 | 13.2 | 13.2 | 0.0 | ⇒ | 78.9 | 15.8 | 0.0 | 5.3 |

≪行動・実践意欲≫
・班活動で友人が失敗した時は、許している

| | ≪５月≫ ① | ② | ③ | ④ | | ≪１１月≫ ① | ② | ③ | ④ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1年 | 85.4 | 14.6 | 0.0 | 0.0 | ⇒ | 90.2 | 9.8 | 0.0 | 0.0 |
| 2年 | 86.1 | 13.9 | 0.0 | 0.0 | ⇒ | 91.7 | 8.3 | 0.0 | 0.0 |
| 3年 | 78.9 | 18.4 | 0.0 | 2.6 | ⇒ | 89.5 | 7.9 | 2.6 | 0.0 |

【検証・評価】
・総じて，全国平均より高い数値である。
・年間を通じて「自己肯定」の意識は上昇傾向にある。自己肯定感が不足していると、自尊心を守るために「他人のせいにする（外罰的反応）」という習性が働く。しかし、意識の矢印を自分に向け、事象を受け入れられるようになったことは、内面的な自信が深まり、自分自身を正しく肯定できている明確な裏付けと言える。
・ネガティブな捉えの生徒が確実にいることもつかみ，個別の支援とともに，戦略的に学級経営に取り組む必要がある。

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | |
|---|---|
| 他教科との関連 | 総合的な学習の時間や特別活動、小中合同防災訓練等を通した学習の目標を新たに定義し、「地域のウェルビーイングを創造する活動」として関連を図った。 |

**事業成果**

【学校評価アンケート（保護者・生徒）】
※主に「地域の幸せ（社会参画）」に関する項目

・私は，地域の活動やボランティア活動（クリーン活動）に積極的に参加しています。
≪生徒回答≫
そう思う　４４％　　どちらかと言えばそう思う　４０％
どちらかと言えばそう思わない　１１％　　そう思わない　６％

・お子さんは，地域のボランティア活動に積極的に参加しています。
≪保護者回答≫
そう思う　20%　　どちらかといえばそう思う　36%
どちらかと言えばそう思わない　２８％　　そう思わない　１６％



【さくらんぼマラソンボランティア】



【花いっぱい運動】

地域貢献等に関し、生徒の自己評価と保護者の認識には乖離が見られる。
今後は、生徒の確かな意識変容を大人側が正しく評価・理解し、学校と家庭、地域が足並みを揃えた意図的・系統的な教育活動を展開することが不可欠である。

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 都道府県・指定都市名 | 山形県 | 学校名 | 東根市立大富中学校 | | |
| 人権課題 | 外国人・障害者・性的指向、性自認 | 対象学年・取り扱った教科等 | 中学校１・２・３年 道徳・総合 | 時数等 | ３時間 |

| | |
|---|---|
| 目標・人権教育のねらい | ロールモデルによる人権課題に対する意識の変容 |
| 実施した内容 | ウェルビーイングの視点を基にした「人権意識」を高める教育講演会<br>～自分らしく生きるとは～ |
| 工夫した点 | 多様な背景を持つ人々が自分らしく生きる尊さを提示するため、ものまねタレントのハリウリサ氏を講師として招聘した。選定にあたっては、著名人としての親しみやすさのみならず、氏の実体験に基づく真摯な語りが、児童生徒にとって「自分事」として捉えるための有効な契機になると判断した。本人選は、学校運営協議会の承認を得るなど、地域が目指す児童生徒像に合致した戦略的な工夫点である。<br>話を通じて、生徒が差別的な視点を自らの課題として内省し、多様性を尊重する主体的な意識変容を遂げることを期待した。 |

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | |
|---|---|
| 他教科との関連 | 特別活動における学級活動の内容（１）～（３）と関連させ，人権課題について学習した。<br>特に，振り返り自己との葛藤場面と位置づけ，実施内容との関連を図った。 |

## 事業成果

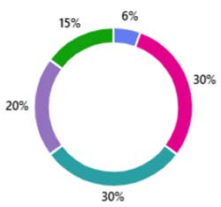
調査手段　Microsoft Forms（マイクロソフト フォームズ）による　　調査項目　以下に示す項目

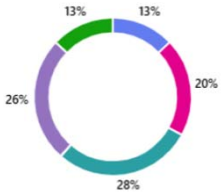
①．とてもよくあてはまる　　②．どちらかというとあてはまる　　③．どちらともいえない
④．どちらかというとあてはまらない　　⑤．まったくあてはまらない

≪知識・理解≫
・ジェンダー平等の意味を知っている
１回目調査で③・④・⑤と回答した生徒が４２％。２回目調査で①・②の割合が２８％増の８６％となった。

≪価値・態度≫
・無意識の差別や偏見が自分にはあるかもしれない

１回目　　２回目




【検証・評価】
様々な事業を通して「差別しているかも」「今の自分は偏見していない」等，個々の物差しで深く考えて現状を見つめていることがわかる

≪行動・実践意欲≫
・差別や偏見（いじめ）を見聞きしたとき，違和感を伝えている（伝えたい）【検証・評価】

１回目調査で①・②の割合が５０％。２回目調査では６０％に増加。③も合わせて４０％が「伝えられない」という回答だが，自分に向き合う誠実さ，真剣さを垣間見ることができる。

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 都道府県・指定都市名 | 山形県 | 学校名 | 東根市立大富中学校 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 人権課題 | インターネットによる人権侵害 | 対象学年・取り扱った教科等 | 中学校１年生　道徳 | 時数等 | ２時間 |

| | |
|---|---|
| 目標・人権教育のねらい | インターネットによる人権課題に対する意識の変容 |
| 実施した内容 | 村山警察署の専門官を講師に招き、SNSに潜む犯罪被害や加害のリスクを具体的な事例から学び、自分や友人を守るための適切な利用方法を習得した。 |
| 工夫した点 | 【自己選択・自己決定能力の育成】<br>インターネット利用における「単なる禁止」から脱却し、正しい知識に基づいた自己選択・自己決定能力の育成を図った。自分も相手も傷つけない「デジタルシティズンシップ」としての資質を養い、情報社会において自律的に行動できる力の獲得を期待した。 |

# 令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

| | |
|---|---|
| 他教科との関連 | 道徳の内容「自律、自由と責任（A 主として自分自身に関すること） 」と関連させ，人権課題について学習した。 |

## 事業成果

【知識・理解】
「自分の送ったメッセージが、相手に意図しない意味で伝わってしまうケース（言葉のすれ違い）を具体的に想像できるか」
できる　６２％　　どちらかと言えばできる　３７％
どちらかと言えばできない　１％　　できない　０％

【価値・態度】
「私は，情報モラルを守り，インターネットやSNS等を安全で適切に使っている。」
そう思う　７７％　　どちらかと言えばそう思う　２２％
どちらかと言えばそう思わない　１％　　そう思わない　０％
「お子さんは，情報モラルを守り，インターネットやSNS等を安全で適切に使っている。」
そう思う　３４％　　どちらかと言えばそう思う　５６％
どちらかと言えばそう思わない　８％　　そう思わない　２％

【行動・実践意欲】
自分や友人がSNSで困った状況になったとき、迷わず信頼できる大人（親や先生、警察など）に相談しようと思う。
そう思う　５２％　　どちらかと言えばそう思う　３７％
どちらかと言えばそう思わない　１０％　　そう思わない　０％

【検証・評価】
・「できる，そう思う」「どちらかと言えばできる，そう思う」の割合が高い。これまでの情報モラル教育の成果と捉えている。しかし，大人と生徒の認識のずれはあることを再確認していくことは大切にしたい。